

リラダンにおける王権のテーマ（2）

小西博子

リラダンはしばしば王権をとりあげてきたが、通底するテーマとして、文化人類学者が指摘する「王の異人性」や「王のスケープゴート性」、その変形としての「王子の受難」などのモチーフがあることを前稿で検討した¹⁾。これらのモチーフは、初源の王権継承がもつ悲劇性、すなわち「王殺し」の伝承に由来するものであったが、本来その悲劇性は、篡奪行為をクライマックスとすれば、死または追放という暗闇へと沈んでいくことを繰り返す円環構造を有していた。ヒロイックな篡奪行為は一瞬の光芒を放ちながら破滅の淵へ消えるか、たとえ王位についても、王たちは栄耀栄華に溺れるどころか、王たることの孤独と憂愁、あるいは権力の失墜への怯えに耐えねばならない。このように光と影が交錯する中で、黄昏の静寂に包まれた一人の王がいる。正統な王位継承者として生まれながら異国での日々を送り、ついに王座につくことのなかったシャンボール伯（アンリ5世）。この一つの「貴種流離譚」を生きた人物と、この人物に一種諦観的な崇拜を寄せたレジティミストたちに、リラダンは共感を覚えていたようだ。死の数年前から、彼はようやくレジティミスト的見解をいくつかの短篇の中で表明するようになった。病床にあったシャンボール伯が危篤状態から脱して小康を得た際に急ぎ発表した『警告』。あるいは、現実派のオルレアニストと理想派のレジティミストの対

注：19世紀後半のフランスの政治社会状況については主に下記を参照した。

René Rémond, *Les Droites en France*, Aubier, 1990.

ジャン＝クリスチャン・プティフィス、池部雅英訳、『フランスの右翼』、白水社、1975。

ヴァルター・ベンヤミン、野村修訳、『ボードレール』、岩波書店、1994。

同上、今村仁司他訳、『パサーージュ論 II：ボードレールのパリ』、岩波書店、1995。

カール・マルクス、村田陽一訳、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、大月書店、1971。

服部春彦編著、『フランス近代史』、ミネルヴァ書房、1993。

井上幸治編、『世界の歴史12 ブルジョワの世紀』、中央公論社、1975。

岩間徹『世界の歴史16 ヨーロッパの栄光』、河出書房新社、1990。

小倉孝誠、『19世紀フランス・愛・恐怖・群衆』、人文書院、1997。

鹿島茂、『新聞王ジラルダン』、筑摩書房、1997。

山田登世子、『メディア都市パリ』、筑摩書房、1995。

桐生操、『ルイ十七世の謎』、新書館、1989。

柄谷行人、浅田彰、阪上孝、上村忠男共同討議、「ボナバルティズムをめぐって」、『批評空間』第2期第6号、太田出版、1995。

1) 「リラダンにおける王権のテーマ（1）」、『ガリア』No.36、1996、pp.17-24。

話という形式をとった『新旧問答』。デビュー作以来のリラダンの「王権」の足跡を、彼の生きた時代を考えつつ辿ってみたい。

I. 近代国家 — 倦怠と懐疑

前稿、「リラダンにおける王権のテーマ(1)」で述べたように、すでに『バラード』(後に『処女詩集』では『ポンピニャン氏に倣って』)で、リラダンは王権(帝権)の不安定さ、危うさを指摘している。革命以来、政権交替はめまぐるしく、至上権をめぐるその周辺はいつも血生臭い様相を呈してきた。彼は祖国を代表する政体として「ブルボン、ナポレオン、ヴァロワ」を挙げ、共和制と自由主義的ブルジョワ王朝であるオルレアン家を認めていない。如何なる旗の下にせよ祖国のために戦った過去の英雄たちへオマージュは捧げるが、「鷲」と「金色の百合の花」しか謳わない。「英雄」、「兵士」、「祖先」、「祭壇」等の詩句が旧価値への執着を示している。しかし、最終節の「王座(帝座)=枢」の比喩は、王権(帝権)そのものの脆さや王朝の存続(ナポレオン帝国を第4の王朝と認めるとして)の危機を暗示するものである。この危機感と愛国主義は、オルシニによるナポレオン3世暗殺未遂の直後という時期と反英感情に因るのかもしれないが、大ナポレオンの栄光に連なるかのように小ナポレオンのクリミア戦争での勝利を謳いながら、「愛国」がしだいに「憂国」の色合いを帯びていくのは何故だろうか。「祝祭の空にもかかわらず、血に染まった未来に詩人[=リラダン]の気は塞ぎ、現在に詩人は涙する。それは彼の国が低下し、青年たちに青春がないからだ²⁾」という一節は何故挿入されているのか。

革命以来わずか半世紀の間のめまぐるしい政権交替の挙げ句、各派の勢力争いの隙間をつく形で帝位におさまったのが、巧みに軍人、農民層をとりこんだナポレオン3世だった。帝政初期は、世界的好況にも恵まれ、技術革新、設備投資による産業革命は完成し、資本主義は体制を整えて、都市の整備、鉄道網の拡大、万国博開催、クリミア戦争での勝利と表向きは順調だった。しかし、この作品が書かれた1850年代末には、57年に米国でおこった恐慌のあおりで工業不況が慢性化する一方、イタリアの解放運動の問題で皇帝暗殺未遂事件が起きるなど、すでに内外で皇帝への不信はつりつつある。秩序と進歩を推進した「近代化」、「都市化」は実は独裁や権威主義によって達成されたのであり、出版統制や見かけだけの普通選挙は権力への追従や政治の停滞を招くにいたる。経済の大発展期であると同時に不正な富の時代ともなった第二帝政。宮廷の奢侈の陰での労働条件の著しい悪化など、矛盾に満ち、政治的スタンスをあえて明確にしないボナパル

2) Villiers de l'Isle-Adam, *(Œuvres complètes I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, p.1037.*

ティズムは、諸勢力の危ういバランスと軍事警察力で保たれている政権であったといえよう。産業振興政策がもたらす高経済成長率、万博の成功、クリミア戦争の勝利、ナポレオン祭典、など華やかな「祝祭の空」にもかかわらず、暗澹たるものを感じるリラダンの憂国は杞憂ではない。1860年前後の空気は『イシス』（1862年）のディグレッションの中で果てしなく綴られる。

優柔不断が我々の時代が呼吸する空気の本質そのものである。変わらぬ信念を持つ人は、大多数のものの目には、「滑稽な奴」「非社交的な奴」に見える。
[...]

人工の乳房からミルクと一緒に吸い込んだ懐疑が一世を風靡する。

生活上の驚きは絶え間なく眼に飛び込んでくるので、大部分の人々はもはやそれを気にかけなくなり、ヨーロッパの思想家の四分の三は何がどうなっているのかわからなくなっている。[...] 歴史年鑑にもものっていないような一種特別な無関心が各人の心の中で義務の感情を凍り付かせている。[...]

謙譲と希望が失われ、自分本位の倦怠が蔓延するようになった。

進歩というものは、それが明らかであるかも、それが必要であるかも、ともに疑わしいものになった。[...] 人々はもはや宗教的ではない。気が小さい。もはや青春もなく理想もない。不安は家庭の中にも、正義の中にも、未来の中にも居座っている。神々のように、王たちのように「芸術」「靈感」「愛」もまた立ち去ってゆく³⁾。

ベンヤミンはそのボードレー論の中で、1850年以降支配的な反動について、「旗色を鮮明にすることはばかげたこと、緊張することは子供じみたこととされ、服装は生色のないもの、たるんだと同時に窮屈なものになる」というドイツの思想家の文章を引用して⁴⁾、パリの政治的停滞の空気を伝えようとしている。ベンヤミンはさらに、オスマンによる都市改革が、文学者（ゴンクール兄弟やゴーティエら）にとっては、都市の未来への明るい展望どころか都市の死滅の予感を与え、「廃墟のテーマ」をも想起させたことも述べている。また、マルクスも、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の中で、「国家機構全体から後光をはぎとり、これを世俗化し、いとわしく同時に滑稽なものにしてしまう⁵⁾」ナポレオン3世をアイロニカルに語り、その秘密主義やあらゆる社会層へのデマゴギー、

3) *Ibid.*, pp.136-137.

4) ベンヤミン、『ボードレー』、p.235。南ドイツの民主主義者フリードリヒ・テーオドーア・フィッシャーの政治批評とある。

5) マルクス、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、p.161。

ルンペン・プロレタリアの買収や、国民的不満をそらす手段としての排外主義のあおりたてなどを批判している。

Ⅱ. 「剣による篡奪」と「ペンによる篡奪」

ナポレオンやロマン派の上昇志向に一足遅れたリラダンの前にはもはやナポレオン神話の時代は終わり、その「身代わり⁶⁾」(マルクス)である甥の時代、英雄なき時代、「剣」の登場する幕はなく、大義も主義主張もない時代、「たるんだと同時に窮屈な」時代があった。リラダンは当然のことながら、ロマン派の影響(ミュッセ、ゴージェ、ヴィニーなど)も受けているが、遅れてきた青年の倦怠と、科学と実証主義の時代の生んだ懐疑という不治の病を患って、そこから脱出するためには、ヒロイズムを演じること、例えば、リラダン自身は「ペン」をとり、彼の分身である高貴な少年ウィルヘルムやセルジウスは「剣」をとることが必要であった。彼自身、1863年にギリシャ王位継承権に名乗りを上げたというのは半ば伝説化したエピソードではあるが、ロマン派たちの「名を揚げる」という夢は、リラダンにあっては、「すでにある名にふさわしいものになる」という悲願であった。「ペンの貴族」とでもいうものになること、「氏素性のよさを高貴な行動で証明すること」、「今日ならば、多少の思想と文体で、自分が何者かであることを証明することである」と彼は書いている⁷⁾。マラルメの語ったように、「彼が望んでいたのは支配すること⁸⁾」であったならば、リラダンの「剣による篡奪」と「ペンによる篡奪」という二重の夢がテキストの内と外で同時に展開することになる。ロマン派の「靈感」と「天才」の決まり文句に、リラダンはさらに「英雄」と「貴族」とをつけ加える。「成り上がり」の帝政貴族の権勢や奢侈に対して、リラダンが言うところの「純粹、高貴、英雄的な血筋」の貴族の多くの現状は、地方の館に引きこもって、領地経営に専念したり、狩猟をしたりの日々であったから、何らかの「行動」を起こすことへの夢は、時代そのものと、貴族階級と、彼自身と三重に彼に取り憑いていたはずである。『イシス』の中で、老貴族フォルシアニはウィルヘルムに、とにかく行動するようにとアドヴァイスする。このプラグマティックな、しかしロマン主義にも相通ずる行動主義者と同じ思想を、「必然性」を求め、「長続きしないもの」を好まなかったはずのチュリアが、ウィルヘルムを前にして語る。無経験な少年が「僕にぴったりの小さな王冠があるぞ」と独り言をいいながら、百戦錬磨の將軍から勝利を勝ち取るという奇跡さえ歴史上には起こることがあると。ここでチュリアは「篡奪の正統性」を熱っぽ

6) 同上、p.155。

7) Villiers de l'Isle-Adam, *(Œuvres complètes I, p.985.*

8) Mallarmé, *(Œuvres complètes, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1945, p.489.*

く語りながらも、「ある程度の家柄と野心を兼ね備えた人物」、いわば革命的であり、同時に伝統的である人物という篡奪者の条件をつけ加える。この条件は、「篡奪の正統性」を「出自の正統性」で裏打ちすることで、偶然による奇跡に明証を与えるかにみえる。王権継承の正統性に関する二つの理念、初源の王権の有していた「篡奪の正統性」と後来の「世襲の正統性」。彼の「ペンによる篡奪」が「氏素性のよさを多少の思想と文体で証明すること」であったように、「剣による篡奪」は彼自らが「貴種流離譚」を生きていること、「受難と流謫の王子」であることを立証せんという夢だったのかもしれない。「篡奪」のダイナミズムと「血統」、「祖先伝来」といったスタティックなものへの執着とのジレンマではないだろうか。

Ⅲ. 黄昏の王権

『イシス』は、不確定性の高いクーデタという企てに身を投じることによって、思索から行動へ、必然から偶然へ、死から再生へと生き方を変えるチュリアを主人公とした観念的小説だったが、『モルガーヌ』(1865年)、加筆改題して『王位要求者』(1875年)では、人物像、政治的、社会的考察に深まりが感じられる。『イシス』後10年余経過し、リラダンも普仏戦争、パリ・コミュン等を経験した⁹⁾。「皇帝万歳」、「共和国万歳」、「コミュン万歳」、「元帥万歳」と刻々変わる『民衆の声』(『残酷物語』所収)。大革命以来の深刻な党派分裂と党内分裂、しかも原理より支持層の階級的、経済的利害関係を代表する各党派の思惑と離合集散によって、政権は常にきわどいバランスの上に成りたっていた。彼は、『民衆の声』や『群衆の焦燥』(『残酷物語』所収)などのコントで、停滞を嫌って次々に新しい指導者を求める民心、血祭りを好む集団の狂気や暴力性をも描いてみせる¹⁰⁾。マクマオン元帥による「道徳的秩序」は王権復興への準備を整えたかに見え、1873年には王党二派統合の動きがあった。しかし、結局、シャンボール伯が三色旗を拒否し、王制復古の夢が遠のいて、共和制への道をどんどん歩むことになる。

『モルガーヌ』ではまだ輪郭のはっきりしていなかった貴族モンテチェルリは肉付けされ、『王位要求者』では、リラダン自身の代弁者となる。大義、確固とした主義主張、変わらぬ信仰、信念など、「不変なもの」の存在に疑問を投げかけ、「朽ちた王座など粉々に砕いてしまおう」と王位転覆に加わりながら、どの政体の存続ももはや信じないこの懷疑主義者は自滅をも辞さない。「リラダン=モンテチェルリが、リラダン=セルジウスの死に立ち会っている」という指摘は意味深

9) コミュンの新聞にマリウスという匿名で寄稿していたといわれている。

10) アラン・ネリ氏は、リラダンにとってデモクラシーはほとんどデマゴギーと同義語であると指摘する。

い¹¹⁾。

正統王朝復興の可能性が薄れ、ジュール・グレヴィが大統領に就任し、共和制が確立していくにつれ、晩年のリラダンの共和派への皮肉は、辛辣なものになっていく。『自然味愛好』（『新残酷物語』所収）では、現代のダフニスとクロエが、自然を次々に破壊していく進歩への皮肉として、王の権力を持つと自慢する共和国大統領（第4代大統領カルノがモデルらしい）に対し、「あなたは自然な王ではないでしょう」と揶揄する。半共和派であるブーランジェ將軍に対しても、「政治をやり、代議士でもあるような將軍」など「自然な將軍ではない」と一蹴して、ブーランジスムを嫌悪すべきデマゴギーととらえている。『大統領冠』（『行路の人々』所収）にいたっては、大統領にも王冠を冠しては如何かと提案してみせる。王冠か帝冠かの茶番劇の裏に、王冠の厳かな輝きが象徴するものは、物質的に王冠を戴くこととは関係ないことを訴えるために。王権へのこだわりは権力のあり方そのものへの批判を伴う。ジュール・グレヴィの娘婿ウィルソンが大統領の権威を悪用してレジョン・ドヌール勲章を金で売っていた事実¹²⁾に、『名だたる婿に』（『行路の人々』所収）の中でリラダンは糾弾する。

実利主義の人々よ、あなた方はたとえ絶対的権力を以てしても、我々を墮落させるもの、そして今しがたあなた方自身をおとしめたものしか創り出すことができますまい¹²⁾。

王権への諦念が深まるにつれて、王権はほとんど神秘的な力を帯びたものとして描かれるようになる。『ルドゥ氏の幻想』（『奇談集』所収）では展示された断頭台をめぐる、また『過去の権利』（『至上の愛』所収）ではルイ17世を自称したノーンドルフ¹³⁾の指輪をめぐる、まるで王家が呪いをかけたかと思わせるような夢幻的な話が展開する。このように得意のコントで王党派の敵に復讐を果たす一方、シャンボール伯の死後書かれた『新旧問答』（『彼岸世界の話』所収）では、シャンボール伯に死後も忠誠を尽くすレジティミストの罪深い諦観、強力な計画やイニシアティヴへの努力を怠らせる憂愁をオルレアニストに厳しく指摘させる。しかし、『バラード』で「それぞれの時代の旗が祖国を象徴する」と書いたリラダンは、30年後のこの『新旧問答』でも旗の問題を繰り返す。

11) Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes I*, p.1093.

12) Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes II*, p.522.

13) オルレアン派の忠誠心の希薄さとブルジョワ的自由主義に相いれぬものを感じるリラダンは新たな可能性として「ノーンドルフ＝ルイ17世」説に正統王朝派の存続の希望をつないだこともあったようだ。父ジョゼフがノーンドルフ支持者だったらしい。『過去の権利』や『ノーンドルフについて』参照のこと。

祖国と、「人類」の繁栄のさなかにあつて祖国を代表したり、その発表を導いたりする旗とは、別々のものなのです。外国に対しては同じものでも、少なくとも我々にとっては別のものなのです。もちろん、我々は、母国を守らば、自分の好みは喜んで犠牲にしますし、そのような際にはどんな旗であれ、その雄々しい象徴の下に結集いたします。しかし旗のもつ偉大さや活力を、無関心で頭の鈍い輩、無意味な皮肉を弄する下衆な輩から守るとなると、各々その良心に従い、自分の標章を押し通す権利があります¹⁴⁾。

そして、シャンボール伯亡き後、王位継承者パリ伯に加担するのを拒むことは、「その光を見つめねばならぬ唯一の星よりも、実現することのかなわぬ夢の暗澹たる夜と虚無とを選んだのだ¹⁵⁾」というオルレアニストの非難も、レジティミストは黙って受けとめるのである¹⁶⁾。

シャンボール伯の死で、君主制が終わりを告げ、旧制度のフランスのなにものが消滅した。「騎士道の輝かしい閃きも、心からの服従も、捨て身の熱情も、崇高な伝統の旗¹⁷⁾」(『警告』)も、みな消え去った。リラダンのとる最終的な道は、過去のヒロイズムへの服喪となる。

王権から遺されたものが、最期までもかく忠誠の心を持ち続けるという光栄のみであったとしても、この遺産相続を誇りとして、気高く、かつての希望の喪に服したことだろう¹⁸⁾。

相対主義と懐疑主義の近代に、変わらぬ信仰や大義に固執したリラダンは、テキストの内でも外でも「篡奪」を果たすことなく、王座の輝きを見ることもなく、シャンボール伯を追って終焉の時を迎え「夢の暗澹たる夜と虚無」へ消えていった。自らも流謫者であると思っていた彼も、「やってくるのが2世紀遅れた王」(『王位要求者』)であった。リラダン=セルジウスの死に立ち会い、リラダン=モンテチュェリは、『王位要求者』の最後をこう締めくくる。

我々は大赦を受け入れるべきではない。我々ならばそれを与えなかつただろ

14) Villiers de l'Isle-Adam, *(Œuvres complètes II, p.841.*

15) *Ibid.*, p.845.

16) オルレアン派の王子をかつて信用したことの無い正統王朝派はむしろ共和制へ加担することを選ぶほどだった。リラダンにとっても王権とは神授であり、オルレアン派の人権に基づく王権は、結局のところ共和制と変わりなく、民主主義に王冠を載せただけのものなのである。

17) Villiers de l'Isle-Adam, *(Œuvres complètes II, p.528.*

18) *Ibid.*, pp.528-529.

う。あなた方は、王権という幻をいまなお世界に与えうる唯二人の人間を殺してしまった。我々にはこの夢から、この二人の亡霊と知り合い、彼らと運命をともにしたという栄光、唯それしか残るべきではない¹⁹⁾。

シャンボール伯の死よりもずっと以前にこの結末を書き上げていた彼にも、「王権」という幻と運命をともにしたという栄光のみが残ったのだろうか。リラダン自身の不遇が、先祖の栄光や紋章に執着し、「黄昏の人間」である貴族の運命を悲劇化してみせるセンチメンタリズムに彼を追い込んだのかもしれない。よくも悪くも19世紀後半に急速に確立した「近代」。「王権という幻」はこの近代にとって時代遅れ、反動には違いない。しかし、この英雄なき時代、メディアの発達に乗りプロパガンダを上手に利用した「近代国家」という「顔のない権力」が肥大し始めた時代にあって、偽の三色旗を掲げる階級社会に欺瞞を感じ、人格を有する「権威」によって社会が支配されていた時代に思いを致すリラダンには、「近代国家とその王座についたブルジョワジーの辛辣な告発者」というもう一つの栄光を認めてもいいのではなかろうか。

(鳥取大学非常勤講師)

19) Villiers de l'Isle-Adam, *(Œuvres complètes I, p.373)*. セルジウスの群衆を前にしての演説の中に、リラダンの理想の「王道」の一端がうかがえる。